

八幡のやぶ知らず

(市川市ってどんな街? 2)



八幡のやぶ知らずとは・・・

国道14号線をはさんだ市川市役所の向かい側、鳥居と^{ほこら}祠に護られた小さな^{たけやぶ}竹藪があります。ここには、一度はいったら二度と出てこれなくなるという伝承があります。広辞苑(第7版)にも「八幡のやぶしらず(八幡の不知藪)」の項目があり、「八幡不知森(しらずのもり)ともいい、ここに入れば再び出ることができないとか、^{たな}祟りがあるとかいわれる。転じて、出口のわからないこと、迷うことなどのたとえ。やわたしらず。」と記されています。

江戸時代に著された地誌や紀行文にも「八幡不知森」として記載されていますので、その^{いわ}謂れを、図書館の文献を使って調べてみましょう。



古典籍を調べるには・・・

明治期以前の書写あるいは印刷された和古書等を「古典籍」といいます。

「葛飾記」「葛飾誌略」「勝鹿図志手繰舟」の三つは葛飾三誌と呼ばれ、市川市域を知るためには「江戸名所図会」、「成田参詣記」の二つの絵図とともに欠かすことのできない貴重な文献とされています。

1. 『国書総目録』全8巻、索引1巻(岩波書店 1963~1972 補訂版 1989~1991) R025.1/コ

日本で書き著された書物(漢籍・仏典などは除く)のことを「国書」と言い、特に江戸時代以前に書かれた文献を調査するときの基本的な目録です。巻数、内容の種別、著者や成立年代、写本・版本の別、翻刻・複製の存在、所蔵機関などが記載されており、活字資料があれば、どの叢書に収録されているかがわかります。

2. 『古典籍総合目録』全3巻(国文学研究資料館/編 岩波書店 1990) R025.1/コ

国書総目録の続編です。国書総目録とあわせて調べます。

☆日本古典籍総合目録データベース(国文学研究資料館) <http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/> (2022.1.9 確認)

『国書総目録』の継承・発展を目指してつくられた、いわば「新国書総目録」です。『国書総目録』(補訂版)『古典籍総合目録』を中心とした目録情報を検索することができます。画像データが公開されているものもあります。

古典籍で記載箇所を調べる

古典籍で、やぶ知らずについて記載されている箇所を調べます。

※本文の該当箇所は[資料編]を参照。 ○本文掲載資料 ●解説資料

1. 「葛飾記」 青山(某) 寛延二年(1749)

葛飾郡中の名所旧跡、神社仏閣の縁起などを解説した当時の観光ガイド的な地誌文献。

○『房総叢書 紀元二千六百年記念 第8巻 紀行及日記』(紀元二千六百年記念房総叢書刊行會 1942)

C10/B1/8 p. 355 ⇒[資料編1]

- 『燕石十種 第5巻』(岩本活東子／編 中央公論社 1980)
C10/B1 p. 140～141 に所収。江戸時代の随筆集で文久年間に成立。

2. 「葛飾誌略」 不詳(馬光とも考えられる) 文化七年(1810)

著者は行徳在住の名主であつたらしい。現在の市川市域全域を含む、古文・詩歌掲載の地誌。

- 『房総叢書 第6巻 地誌其一』(1941) C10/B1/6 p. 484 ⇒資料編 2

- 『『葛飾誌略』の世界』(鈴木和明／著 文芸社 2015) I/B5

3. 「手くりふね(たぐりふね) 勝鹿図志」 鈴木金堤 文化十年(1813)

上下二巻の構成で、上巻は葛飾の浦を中心に行徳領の紹介、下巻は句集で葛飾北斎、谷文晁らの挿絵入り。

- 『勝鹿図志手繰舟：影印・翻刻・注解』(崙書房 1980) I/B0 p. 26～27, p. 112～114 ⇒資料編 3

- 『勝鹿図志手ぐり舟：行徳金堤の葛飾散策と交遊録』(宮崎長蔵／著 ホビット社 1990) I/B0 p. 169～174

4. 「江戸名所図会」 松濤軒斎藤長秋(幸雄)／著 長谷川雪旦(宗秀)／画 天保五～七年(1834～1836)

- 『日本名所風俗図会 4 江戸の巻Ⅱ』(朝倉治彦／編 角川書店 1980) I/C0 p. 591～592 ⇒資料編 4

- 『江戸名所図会 下巻』(評論社 1996) I/C0 p. 734～737 原寸大のまま完全復刻。

- 『City Voice：市川の街から No.20』(市川市 1996) I/F5/20 「特集：江戸名所図会を歩く」 p. 15～27

5. 「成田参詣記」(成田名所図会) 中路定俊／著・中路定得／補 長谷川雪堤／等画 安政五年(1858)

- 『現代語訳成田参詣記』(若杉哲男・湯浅吉美／編 大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所 1998)
I/C3 p. 161～172

- 『市川市史 6下』(市川市 1972) I/B1/6-2 p. 198, 203 ⇒資料編 5

- 『『成田参詣記』を歩く』(川田寿／著 崙書房 2001) I/C3 p. 66～70

6. 「下総名勝図絵」 宮負貞雄 弘化三年(1845)

- 『房総叢書 第8巻 紀行及日記』 p. 89 ⇒資料編 6

- 『下総名勝図絵』(宮負貞雄／著 川名登／編 国書刊行会 1990) C20/C1 p. 368 に図版あり

7. 「水戸佐倉道分間延絵図」 文化三年(1806)

江戸幕府が街道の管理のために、寛政(1789～1801)年中に、道中奉行に制作を命じた五街道分間延絵図の一つです。現在、原本は東京国立博物館に所蔵されています。葛飾八幡宮や法漸寺と、街道を挟んで「八幡不知ノ森」が描かれています。 ⇒右図版

- 『水戸佐倉道分間延絵図 第1巻』(児玉幸多／監修 東京美術 1990)
I/C3 「新宿 八幡」

☆Web「東京国立博物館画像検索」

<https://image.tnm.jp/image/1024/C0027802.jpg> (2022.1.9 確認)



8. 「遊歴雑記」(十方庵遊歴雑記) 大浄(敬順) 文化十一年(1814)

- 『遊歴雑記初編 1』(十方庵敬順／著 朝倉治彦／校訂 平凡社 東洋文庫 1989)
V291.3/3/1 「三十二 やはたしらずの藪の事実」 p. 92～94 ⇒資料編 8

9. 「金ヶさく紀行」 中村国香 明和二年(1765)

- 『房総叢書 第8巻 紀行及日記』 p. 22 ⇒資料編 9

10. 「神野山日記」 間宮永好 嘉永七年(1854)

- 『房総叢書 第8巻 紀行及日記』 p. 447～448 ⇒資料編 10

11. 「嘉陵紀行」 村尾伯恭(嘉陵) 文政十二年?(1829?)

- 『江戸近郊道しるべ』(朝倉治彦／編注 平凡社 東洋文庫 1985) I/C1 「真間の道芝 中山国台も」
p. 268～269 ⇒資料編 11

12. 「船橋紀行」 守黙庵／著 嘉永七年（1854）
○『房総叢書 第8巻 紀行及日記』p.185 ⇒資料編 12
13. 「遊房総記」 小野正端 文政六年（1823）
○『房総叢書 第8巻 紀行及日記』p.128 ⇒資料編 13
14. 「千葉県東葛飾郡誌」 大正十二年（1923）
○『千葉県東葛飾郡誌』（千秋社 1988）C22/C0 「第十六章 名所旧蹟」p.1231～1232 ⇒資料編 14
15. 「日本伝説叢書」 大正八年（1919）
○『日本伝説叢書 下総の巻』（藤沢衛彦／編著 日本伝説叢書刊行会 1919）C10/D7 p.94～95
⇒資料編 15
16. 「籤黄鵠八幡不知（やぶうぐいすやわたしらず）」山々亭有人／作 歌川芳虎／画 慶応二年（1866）
☆Web「国文学研究資料館 近代書誌・近代画像データベース」http://dbrec.nijl.ac.jp/BADB_GDNT-00098
(2022.1.9 確認)

写真で調べる

1. 『千葉写真大観 第四回 東葛飾郡の巻』（千葉写真大観刊行会 1931）
書庫 I/C0 発行年から昭和初期頃の写真と推測される。
2. 『この街に生きる、暮らす 市川市史写真図録』（市川市史写真図録編集委員会／編 市川市文化国際部文化振興課 2014）I/B7
「1911(明治44)～1922(大正11)年頃」p.38～39 ⇒右写真
「1962(昭和37)～1963(昭和38)年」p.40
3. 『目で見ると市川 市川市市制二十五周年記念出版』（市川毎日新聞社 1958）書庫 I/F1/58 撮影年不明



伝説・昔話で調べる

1. 「八幡のやぶしらずの竹は何本あるか」『市川のむかし話』（市川民話の会 1980）I/D7 p.112～116、
『市川のむかし話 改訂新版』I/D7（市川民話の会 2012）p.92～95
旅人が子どもたちに捕らわれた大きなあぶを助ける。竹の数を正しく数えた者に褒美を与えるという高札を目にして、村人たちの止めるのを振り払い藪の中に入ると、助けたあぶが竹の本数を教えてくれる。
2. 「八幡のやぶしらず」『市川のむかし話 続』（市川民話の会 1990）I/D7/2 p.123～126
将門の首を塩漬けにして都に送る時に、七人の武士が奪い返そうとするが、八幡の森あたりでいなくなり、代わりに七つの土人形に変わっていた。
3. 「やぶしらずの機織り娘」『市川のむかし話 続』p.127～130
やぶの中から機織りの音が聞こえてくるようになった。ある日、近所の農家に美しい娘が機織りの道具を借りに来たので貸したが、数日後に返しに来たときには血のりがついていて。
4. 「やぶしらずのきつね」『市川のむかし話 続』p.131～134、『市川の伝承民話』（市川民話の会／編 市川市教育委員会 1992）I/D7 p.38～40
男の子が狐憑きになったときに、狼を祀る三峰山の掛軸をかけたなら、怖がって追い払うことができた。
5. 「やぶしらずに入った水戸黄門」『市川のむかし話 続』p.135～139、『同 改訂新版』p.88～91
諸国を旅していた黄門様が供も連れずに森に入ると、白髪の老人に出会う。老人が語るには、平将門討伐のために、平貞盛は八門遁甲の陣を築き、討伐に成功するが、この地に死門の一角を残すことになり、わざわざ

を起こすことになるため、里人たちの出入りを禁じたとのこと。老人は「今回は許すが、強く戒めておけ」と言って黄門をやぶの外に返した。

浮世絵で調べる

歌舞伎の演舞「^{こうもんきやわたのおおやぶ}黄門記八幡大藪」(明治11年11月)の題材になり、興行広告の錦絵(3枚組)として「^{しらすのやぶやわたの}不知藪八幡之^{じっかい}実怪」(月岡芳年/画)が知られています。以下の資料にカラー図版が収録されています。

『芳年』(月岡芳年/画 平凡社 2014) 721.8/7 図版 p. 90、解説文 p. 245 ⇒ [下図版](#)

☆Web「千葉県立図書館 菜の花ライブラリー」でもカラー画像の閲覧ができます。

http://e-library.gprime.jp/lib_pref_chiba/da/detail?tilcod=0000000014-CHB1696417 (2022.1.9 確認)

藪に入った水戸公(図版右下の老人)の前に、魍魎魍魎を従えて白髪老人が登場する場面です。



☆Web「立命館大学アート・リサーチセンター ARC浮世絵ポータルデータサービス」

https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_portal.php (2022.1.9 確認)では長谷川貞信の「^{こうもんきやわたのおおやぶ}黄門記八幡大藪」の役者絵がカラー画像で閲覧できます。

国会図書館デジタルコレクションで調べる

国立国会図書館「デジタルコレクション」<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/994949/32> (2022.1.9 確認)では、今まで紹介した資料のいくつか(『江戸名所図会』や『房総叢書』など)の閲覧が可能です。また、他にもこんなユニークな資料を閲覧することができます。

1. 『黄門八幡大藪記』(玉置清七/編 玉置清七 1878)

絵師玉置清七の絵草紙です。

2. 『明治奇聞 第2編』(宮武外骨/編 半狂堂 1925-1926) p. 16~17

「八幡不知の大流行」として、迷宮式の一廊内に八幡の森に擬した藪を構造し、入場料をとって藪に入り藪から無事に出てきた者には商品を呈するという江戸時代に行われた興業が、東京時代に復活し明治10年頃に大流行したことが掲載されています。

3. 『競争遊戯最新運動法』(佐々木亀太郎/著 藜光堂 1903) p. 48

個人競争の一つとして「八幡不知」という競技が掲載されています。

◆◆ 資料編 ◆◆

以下は、前述した文献資料から「八幡のやぶ知らず」の記載部分をテキストとして抜き出したものです。

※旧字体やルビは、底本に使った資料のとおりとした。

1. 葛飾記

八幡宮鐘の銘並寶物

又、八幡宮鳥居まへより南方八わた町入口に八幡知らずの森と云フ古き森有り。森餘り大きからず。高からず。然レども、鬱々として其中見エ透カず。古木朽木の類、幾年か人の手に觸れざる有り。此森の内に入るもの無ければ也。若シ入れば^{たちどころ} 豎^{すく}に駐み死して、出ヅる者なしと云へり。是は平親王將門、平の貞盛の矢にあたり、秀郷の為に討たれ給ひ、猶生ケる如くにして通り給ふ時、六人の近習、此所迄慕ひ來り、土の人形と顛れ、終に此森の中に入り不レ働。後、雨雪に解ケて終に土地と成れりと云へり。依て、此中の土を踏む者は、その崇りにて死して出デざると也。其所、昔より里諺に云ヒ傳へたり。然レども、此所相馬郡よりの順路に非る故いかゞ。松戸通りたるべきか。愚按ずるに、是は將門は葛原の親王の後胤たる故、葛飾の葛の縁を以て、近習の人の内にて、此所に其由緒を残されたるなるべし

〔『房総叢書 第8巻 紀行及日記』p. 355〕

2. 葛飾誌略

一、八幡不レ知森。諸國に聞えて名高き杜也。魔所也といふ。又、平將門の影人形、此所へ埋めてありともいふ。又、日本武尊東征の時、八陣を鋪き給ふ跡とも云ふ。其外説々多し。予、古老に委しく尋ね聞きけるに、此所昔假遷宮の神也。故に敬して注連を引き、猥に入る事を禁ず。不淨を忌む心也。昔は今の街道にあらず。古八幡に中山道といふ字有り。其所街道にて、宮居も其所に北向にてあり。國初様御通行の砌、此街道を開く。并に宮居も今の所に遷し、大杜に造營有り。云々。此杜の地所、今は本行徳村の同地内に成りたり。八幡三不思議、杜、一夜銀杏、馬蹄石、是を云ふ。

〔『房総叢書 第6巻 地誌其一』p. 484〕

3. 手くりふね（たぐりふね） 勝鹿岡志

八幡不知森^{やはたしらずのもり} 日本武尊八陣^{しか}を布せ給ひし跡なる故、人出る事あたはずと云伝ふ。

按るに八陣の法は武内大臣初て漢土より学び來りて応神天皇に伝へ奉る。応神天皇は日本武の御孫也此天皇八陣の法よく熟し〔ㄱ音〕じ玉ひ国中大平なりしとぞ。所謂八陣には八本の幡有（る）所以に後人、応神天皇を八幡武太神と崇め奉る。又云、御誕生の時、白幡八流下り立たるいわれにより八幡とも云といへり。かくあれど、景行天皇の代八陣の法日本に伝りたる事を^(きか)聞ず。只、日本武尊の御陣所跡なれば恐れて入る事を禁ぜしものならん。

〔『勝鹿岡志手繰舟：影印・翻刻・注解』p. 112〕

4. 江戸名所図会

八幡不知森^{やはたしらずのもり} 同所、街道の右に傍^そひて一つの深林^{しんりん}あり。方二十歩に過ぎず。往古八幡宮鎮座の地なりと云ひ伝ふ。すなはち森の中に石の^{こほら}小祠あり。里老云ふ、人^{あやま}謬ちてこの中^{うち}に入る時は必ず神^{たたり}の崇ありとてこれを^{いまし}禁む。ゆゑに垣を繞らしてあり（あるいは云ふ、むかし平親王將門、平貞盛^{ひのさか}が矢にあたり、秀郷^{ひでさと}が為に討たれ、後六人の近臣と称する輩^{ともがら}、その首級^{しゆきゆう}を慕ひ、この地に至りし頃、この森の中^{うち}に入りて働かず、終に土偶人^{つひ}と顛^{どくうじん}れたりしが、その後雷雨に破壊せしより、この地を踏む者あれば必ずたたりありとて、大いに驚怖するといへり。またある人いふ、この森の回帯^{はえ}はことごとく八幡の地にして、森の地ばかりは行徳^{ぎようとく}の持分なりと。このゆゑに八幡村の中^{やはた}に入会^{あひあひ}といへども、他の村の地なるゆゑに、八幡の八幡しらずとは字せしと。さもあらんか。）

〔『日本名所風俗図会 4巻 江戸の巻II』p. 592〕

5.成田参詣記

八幡不知森同所南の方にあり方二十歩許り往古八幡宮鎮座の地なりと云傳ふ今も法漸寺持なり森の中に小石祠あり稻荷を祭れり里人云若し人此中に入時ハ必ず神の祟ありとて垣を繞らして入ことを許さず一説に此森の邊八幡の地にして森のみ行徳の地なり故に八幡志らずと云とぞされどそのみなれば垣を繞らして人を入れざる事やはある必官社の址か又は國司などの塋域ならんか里説に昔平将門の餘類の靈の土偶人とあらはれたることありしなど云を思へば墳墓の地にて土偶は殉葬のものなるべし

ルビ判読不明箇所があるため記載せず（『市川市史 第六卷下』p. 198, p. 203）

6.下総名勝図絵

八幡不知の森

同所街道南の側にあり。往古、八幡宮鎮座の地なりといひ傳ふ。森の中に小祠あり。里人の説に、人過ちて此の林中に入る時は、必ず神の祟りありとて、是をいま禁しむ。（『房総叢書 第8巻 紀行及日記』p. 89）

8.遊歴雜記

一 同所やはたしらずの藪は、八幡宮の門前、南側の路傍にあり、藪の間口漸く拾間ばかり、奥行も又拾間には過まじと思はる、中凹の竹藪にして、細竹・漆の樹・松・杉・梅・栢・栗の樹などさま／＼の雜樹生じ、南の方日表なれば、路傍より能見えすくなり、

元来、此藪四方は垣根等の構えなければ、麦・米・粟・稗などのよろづの搗屑或は塵芥の捨処とし、藪際より中の様子を見るに、甚汚穢して怪異あるべき凄凉き、更に藪には見えねど、古来より種々の奇怪の巷談区ありて、水戸光圀卿は試し見んと、推て此叢林に入、顔色土の如くにして出給ひ、いか様排事はせまじきものよと宣ひしのみにて、子細をば更に仰なかりし、など巷談し、或は強気の者世上の風聞をなじりて、此藪に入、久しくして立出、ふるへ／＼藪中の怪異を語り終て、即時に血を吐死せしといひ、又は、誤りて此藪林に入し者は、更に出口を失ひ、路に迷ふて酔たるが如く、漸く人に引出されて後、煩ひて死せしといひ、又は、里見安房守は六具に身を堅め、馬にまたがりたるを見たるなど、むかしより伝ふる処、説々同じからず、されば、此藪四角にして、凡百坪余には過まじ、殊に雜樹扶疎に生じて繁茂せざれば、藪中暗からずして、外より一々能見ゆ、

土人に尋るに、怪異の説大同小異也、是信じがたし、爰に小岩田御番所附名主忠右衛門申けるは、

此やわた宿の南半みち余に、行徳領に兵庫新田といふ村あり、彼藪その新田一村の持にして、誰人の所持の藪と限るにあらず、故に、やはた宿内の藪ながら他村持の地面なれば、宿内の者は一切構はず、依て此藪通り掃除等も、検見、又は佐倉の城主通行の節は、兵庫新田の百性(姓)来りて取片付侍れば、坪数もしらず、藪の中には何のあるやら元より用なき他村の藪なれば、宿内の者這入べき様はなし、故に、やはたのやはたしらずの藪と申ならはし侍る、

と物語りき、此説こそ実事と思はる、

予五七年以前、里夕・巴水の兩人を同道し、本処さかさい川より両国まで同船せし砌、忠右衛門をも便船さしめ、彼より直咄しに聞て、日頃の疑念はれたり、総て物事は念入て能聞糺すべき事にこそ、聖人の下聞に恥ずと宣ひしは宜也、

實にも、彼竹藪の中式三間をへだて、小さき石の小祠あり、鳥居には注連を引はえたり、若怪異ありて、一寸も踏込がたくは、何ぞかくの如きのかざりあらんや、又里見房州等が戦死の疑念、此藪林にとゞまらば、一切の搗屑・塵芥の類を捨る者に、咎めもなく崇らざるは、浮説虚談をいひ伝えたる事と覺ゆ、能その本源をわきまへずして、万事人には伝えがたし、君子の博く学んで内におしゆるとは金言なるべし、

件の忠右衛門は素丸の門人にして誹諧^{はいかい}をたしなみ、名を巴川といひける、
後人遊歴し、彼藪林を見てしるべし、

(『遊歴雑記初編1』p. 92~94)

9.金ヶさく紀行

一、八幡村に應神祠あり。神領、聞を失す。社樹に五抱の銀杏一株あり。鎌倉府應神祠石階の側にある處のもの
と伯仲す。

一、應神祠の前に茶肆あり。屋後に八幡森と呼べるあり。故舊相傳ふ、「此の森へ一回入る者は長く不レ還」
と。怪しき事なり。

(『房総叢書 第8巻 紀行及日記』p. 22)

10.神野山日記

此の社近き程に八幡不知と呼ぶ藪あり。一四五間が程、粗垣^{あらがき}ゆひ渡して、人立入るまじき由の札立てり。こは、
「此の内に入るもの、出づることなし」と、いひ傳へたればなりけり。又の説に、「こは、むかし八幡宮鎮座の
所なれば、此の内に入る者は必ず祟りを蒙る故に、垣をゆひ廻して入る事を許さず」といへり。いづれか善き、
いづれか悪しき。更に辨^{わかま}ふべくもあらず。又、元祿の頃、水戸の贈大納言光空卿の君、ひとり入り試み給ひけ
るが、其の故をば語らせ給はで、「又な入りそ」と、宣ひし由いへり。されど、此の説は、彼の御館の人などは
更に諾^{うべな}はぬ説なり。げに、さばかりの御身にて、いかに官^{つかさ}を返され給へるからに、かるくしくかゝる御振
舞ひやは有るべき。證^{あかし}を待つまでもなく空事^{そらごと}とは知るべきなり。

(『房総叢書 第8巻 紀行及日記』p. 447~448)

11.嘉陵紀行

こゝを出て、元来し路を市川の方へ行ば、途^{みち}の南側に、八わたしらず(市川市八幡一丁目)といふ木立あり、
四面垣ゆひ廻して、人の立入ぬ様にす、うちに少し凹の所あり、入人必死すと云、瘴気時として発するが故なる
べし、上総のうちにも、こゝに同じ様なる所あり、酢をあつく煮立、それを、わらみごにて、まきちらしながら
行ば、子細なしと云

その向ひ道の北側に、八幡宮(葛飾八幡宮、市川市八幡四丁目)立せ給ふ、…

(『江戸近郊道しるべ』p. 268~269)

12.船橋紀行

此の郷には八幡知らずといふ藪あり。水戸西山公の試み給ひしなど孟浪の説珍しからず。八幡にしてはいかな
らん。東海道に親知らず・子知らずといふ所ありとぞ。會參は車を返しつべし。

(『房総叢書 第8巻 紀行及日記』p. 185)

13.遊房総記

八幡村の右の方に八幡不知とて人の入ることを得ざる森あり。四方わづか二三十間許り、竹木植多立てたる
まゝ取り拂ふこともせず。俗説怪妄もとより辨ずるに足らず。

(『房総叢書 第8巻 紀行及日記』p. 128)

14.千葉県東葛飾郡誌

八幡不知の藪

八幡町八幡神社の大華表より數歩、國道に沿うて廣さ方二十餘歩に木柵を回らせる竹林あり、是れ古來著名な
る八幡不知の藪なり、今柵内五百十一歩碑を建て保存に努む、而して古より人の之に入る者あれば必ず祟ありと
稱し里人をして恐れしめし諸説を擧げんに、

- 一、往古八幡神社を勧請したる舊地なりと傳ふ林中今尚ほ石造の小祠を存せり。(稻荷を祠る)
- 二、行徳の入會地なるが故に八幡町民の妄に入るを許さざりしを以て八幡不知と名づけたり。
- 三、貴人の古墳なりしを以て里人をして恐れしめ以て之れを穢すを避けたり。
- 四、往昔毒瓦斯を發生する孔穴ありて、人附近に立寄れば必ず死せり、又底無の小池ありて人落つれば又出づる能はざりし。
- 五、天慶年中平貞盛此に八門の陣を敷く、其將門を平げ上洛するに臨み土人に告げて曰く、此は八門遁甲の陣にして死門の一角を遺す、後世人跡を容るゝ勿れ、犯さば必ず祟ありと衆怖れて入らずと。
- 六、萬治年間水戸黄門光圀、土人の言を聞きて奇異の思をなし、入りて神誠を蒙り、土人に告ぐる様、是れ凡人の足を容るべき地に非ず汝等決して禁を犯す勿れと愈々里人を恐れしめしと。
- 七、日本武尊の御陣所跡なれば恐れて入る事を禁ぜしものならんと。

諸説紛々其是非を斷ずべきに非ず、斯くして千古の不可思議を秘めて幾世に傳はらん。

又里傳に昔平將門の餘類の靈土偶人となりて此森中より現はれたることありしなど云へり、思ふに古墳の埴輪土偶なりしならん。

日くらしや八幡不知も家つゞき	桃林
茨の香や八幡不知のふくらがり	蕉雨
○八幡所見	小菅貫
不知何處不知叢	野雉一聲林表風
晨霞疎々看忽散	獵人提銃出葱籠

『千葉県東葛飾郡誌』 p. 1231~1232)

15. 日本伝説叢書

八幡不知森 (東葛飾郡八幡町大字八幡字下町)

八幡町法漸寺(舊八幡神社の別當、天台宗寛永寺東寺、本地阿彌陀如來。)の南の方、千葉街道の西側に接し、三百坪ばかりの地林藪を爲し、八幡不知森と呼ばれてゐる。方二十歩に過ぎないけれども、一旦此中に入るもの、必ず出づることなし(「常總日誌」とか、此森に入れば必ず神の祟あり(「成田名所圖會」)などといひ傳へられてゐる。所謂八幡の八幡知らずは即ち是で、往古八幡宮鎮座の地であるといひ傳へられ(今も、法漸寺の持地である。)て、周圍に木柵を繞らしてゐる。森の中には、小石祠(稻荷を祀るといふ)を存してゐるが、一説には、官社の地ならざれば、必ず國司などの塋域であらうといはれてゐる。(「成田名所圖會」)里俗には、昔平將門の餘類(近臣六人其級を慕うて此地に来るといふ。)の將門の首級を慕うて此地に來り、此森中に入りて動かず、その靈遂に土偶人となりてあらはれたが、後雷雨に破壊して此地を踏む者に祟ありなどといひ傳へてゐる。これを、「成田名所圖會」などは、此地墳墓の地にして、土偶は其殉葬であらうといつてゐる。今も、柵外に、「不知八幡森」の五字を刻んだ一碑を建て、此柵内に入る事を戒めてゐる。

『日本伝説叢書 下総の巻』 p. 94~95)

図書館では皆様の調べ物や課題解決のために様々なお手伝いをしています。調べ方がわからない時は遠慮なくお問い合わせください。また、図書館のホームページからもお問い合わせいただけます。 お問い合わせ：市川市中央図書館 047-320-3346